小麦やナガイモ　凍害不安　畑に「布団」なく　雪不足憂う農家　2020年1月11日

管内では８日に約半月ぶりの降雪を記録したが、管内の農家は依然として雪不足を懸念している。少雪は秋まき小麦の生育に影響するほか、土壌凍結が深く進むと、春掘りナガイモの凍害も発生するなど影響が大きい。関係者は今後の天候の行方を注視している。

雪が積もった小泉さんの畑

通常、冬季は畑を覆う雪が「布団」の役目を果たし、過度な土壌凍結を防ぐ。十勝総合振興局農務課によると、この時期の秋まき小麦は芽が出ており、雪がないと直接寒風に当たるため、枯れてしまう場合がある。

少雪により土壌凍結が進むと、収穫されずに残ったジャガイモが雑草化する「野良イモ」を低減させる効果があるものの、春に掘り出すため一定量を畑に残しているナガイモに腐れが出てしまい、商品として出荷できない部分が発生する。

春にナガイモを1.2ヘクタール分掘り出す帯広市基松町の小泉裕亮さん（44）の畑は先日まで、所々で土が見える状態だった。現在畑は雪で覆われ「今の状態であればある程度保温効果もあると思うが、暖かい日になると解けてしまう。１月でも気温が高い日もあり、まだ不安はある」と話す。

昨年も少雪で、ほとんどの春掘りナガイモが凍害の影響を受けた農家もいた。「今年もこれ以上深く凍結すると、出荷する部分は凍って収量への影響が出る」と心配する。

小麦などを生産する芽室町の坂東隆幸さん（61）は「少雪で春の土が乾きすぎると発芽不良を起こす場合がある。（凍結で）小麦の根が切れてしまったり、春作業が遅れたりするのも心配」と話す。

帯広測候所によると、今後１週間、管内でまとまった降雪の予報はない。

十勝総合振興局農務課は「平年であれば２月までで畑に20～30センチの雪が積もり、保温の効果が出る。今後雪が降らなければ、また畑に雪が残らない状況になる」としている。

昨年の農業労災30件　機械関連７割、外国人の安全周知も課題　過去５年で最多　速報値　2020年1月18日

十勝管内で農業関連の労働災害が増加している。帯広労働基準監督署によると、昨年の農業関連の労災は30件（速報値）で、過去５年間で最も多い。機械の大型化や外国人材の雇用などが背景にあるとみられ、帯広労基署は安全啓発に力を入れている。

帯広労基署では農業者向けに新しいリーフレットを作成するなど、注意喚起に力を入れている

農業関連の労災は2015年以降、20件前後で推移していたが、19年に30件（うち死亡事故２件）となった。同年の全産業における農業労災の割合は６％だが、労働者を雇わない個人事業主は含まれていない。帯広労基署は「個人事業主の事故を含めるとさらに増える。災害発生割合が最も高い製造業（全産業における17％）を超える可能性がある」と指摘する。発生時期は繁忙期の秋口が最も多い。

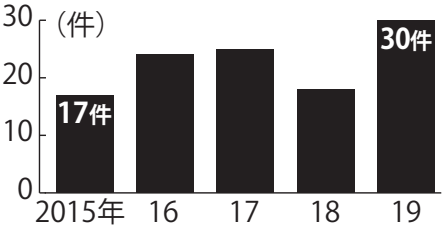
農業関連の労災では、農業用機械の「はさまれ・巻き込まれ」、農機やはしごなどからの「墜落・転落」が多く、19年は両項目で70％を占めた。エンジンを停止せず機械の不具合や異物の詰まりを直そうとしたり、はしごを使わずに大型の農機から飛び降り、事故につながった例がある。

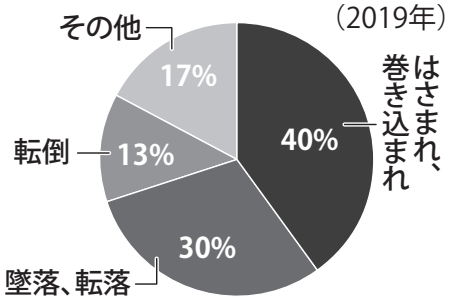
昨年増加した背景には、外国人材の雇用の増加などで安全面での十分な周知が難しかった点が要因として考えられている。

労災の増加を受け、帯広労基署は昨年、農業者向けに安全のポイントをま

❖農業に関する労働災害の発生状況

※帯広労働基準監督署による。2019年は速報値



❖農業に関する労働災害の内訳

（2019年）